

Japanese vereniging
voor de studie van

ベルギー研究会 会報

Newsletter of Japanese Association for Belgian Studies

japonaise
lges

第7号
2019年5月

sche Vereniging
Belgische Studien

Association japonaise
d'études belges

「ベルギー学」シンポジウム2018を開催しました。

2018年12月7日、8日に開催された「ベルギー学」シンポジウム2018「交流のいま」は、100名を超える参加者にお越しいただき、無事盛会のうちに終わることができました。開催にあたり、会員の皆様には多方面にわたりご協力いただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

「ベルギー学」シンポジウム実行委員会

実施概要

名 称:「ベルギー学」シンポジウム2018「交流のいま」

日 時:①2018年12月7日(金) 17:30-19:00

②2018年12月8日(土) 10:00-18:00

会 場:①在日ベルギー王国大使館

②上智大学四谷キャンパス

主 催:「ベルギー学」シンポジウム2018実行委員会、上智大学ヨーロッパ研究所

共 催:日本ベルギー学会、ベルギー研究会

協 力:在日ベルギー王国大使館、ベルギー王国フランス語共同体政府国際交流振興庁(WBI)

後 援:アーツフランダース・ジャパン、在日ベルギー・ルクセンブルグ商工会議所(BLCCJ)、日本・ベルギー協会

プログラム

2018年12月7日(金) (オープニングイベント)

演奏会

ジャン＝バティスト・ルイエ: 2本のフルートのためのソナタ 第1番 二長調より

ジャック＝マルタン・オトテル(ル・ロマン): 二つの高音楽器のための組曲 第1番 四長調より パッサカイク

相川郁子(フラウト・トラヴェルソ) & 野崎真弥(フラウト・トラヴェルソ)

アンリ・プッサー: 「森の空地の為の5つのため息」(1989)より「III, IV, V」

薬師寺典子(ソプラノ) & 守田絢子(ピアノ)

日本民謡: さくら

アストル・ピアソラ: 「タンゴの歴史」より第3曲目ナイトクラブ1960

植川緑(サクソフォン) & 高口かれん(マリンバ)

ドビュッシー: ヴァイオリンとピアノのソナタ

磯絵里子(ヴァイオリン) & 飯野明日香(ピアノ)



2018年12月8日(土)

基調講演

Changes in Exchanges: Challenges and Continuity in Research on Comparative Thought between Belgium and Japan
Andreas THELE (University of Liège)



研究発表

オランダ東インド会社 VOC に対する南ネーデルラント (ベルギー) の影響について
小川 秀樹(千葉大学)

2018年11月4日コミュン選挙結果から見えること
武居 一正(福岡大学)

Exploring New Ways of Learning : Diffusing the Business Philosophy of Kazuo Inamori to the French Speaking Community
Claire GHYSELEN (University of Liège)

Ongoing Exchanges between Belgium and Japan in the Fields of Business and Technology

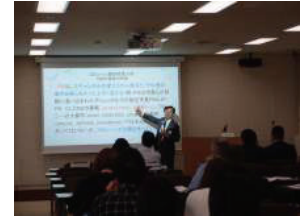
Jo ANSEEUW (Materialise Japan K.K./Belgium-Luxembourg Chamber of Commerce in Japan)

蘭和翻訳の文化的側面にみる多言語使用

井内 千紗(国際短期大学)、ルート・ヴァンバーレン(筑波大学)

A Linguistic Perspective on Shifts in Dutch-Japanese Translation

Ruth VANBAELEN (University of Tsukuba), INOUCHI Chisa (Kokusai Junior College)



パネルディスカッション

From Liège to Kyoto and Back : Creation of an International Network in Game Studies
Eric HAUBRUGE (University of Liège), YOSHIDA Hiroshi (Ritsumeikan University),
Fanny BARNABE (University of Liège)



シンポジウムを終えて

2016年に開催した日白修好150周年シンポジウム「文化・知の多層性と越境性へのまなざし—学際的交流と「ベルギー学」の構築をめざして—」の成功を受けて、2018年12月8日(土)に2回目の「ベルギー学」シンポジウムを開催した。今回のテーマは「交流の「いま」」。ここにちもなお進展し続ける、日本とベルギーの人的・知的交流に焦点をあてた。希望の発表が見られなかったという前回の参加者からの感想を反映させ、今回のシンポジウムでは分科会を設けず、分野を問わずに一つの教室で講演と研究発表をおこなった。

午前中の基調講演には、リエージュ大学のアンドレアス・テーレ氏に登壇いただいた。テーレ氏の講演では、比較思想研究における日白間の学術交流が極めて活発であることが明らかにされた。午後には、研究発表とパネルディスカッションが続く。研究発表を公募し、テーマに沿ったものをプログラムに組んだことで、分野・領域の違いをこえて、日白学術交流の「いま」を知る機会をつくることのできたのではないだろうか。そこでは、昨年11月のコミュン選挙、仏語圏における日本型経営哲学の影響、蘭和翻訳における文化的差異などが論じられた。パネルディスカッションでは、リエージュ大学のエリック・オーブリュージュ氏、ファニー・バルナベ氏、立命館大学の吉田寛氏が登壇し、ゲーム研究を通じた日白交流の最前線が紹介された。

前回よりも規模を縮小したとはいえ、103名の来場者に恵まれたことは大きな成果だったといえよう。実施したアンケートをみると、様々な分野に一度に触れられる機会だったことについて、肯定的な評価を多くいただいた。一方で、このシンポジウムが「ベルギー学」の構築に寄与するのか、そして、そもそも「ベルギー学」とは何か、という問いは、前回に引き続き残されたままであったかもしれない。この点については、「ベルギー学」はディシプリンではなく「場」である、ことをひとまず強調して、次のシンポジウムにつなげたいと思う。

「ベルギー学」シンポジウム2018実行委員会
委員長 中條健志

2018年度の研究会報告

2018年度は、西宮、東京、長崎、ブリュッセルにて、計5回研究会を開催いたしました。

第74回研究会

日時: 2018年5月25日(土)13:30-17:30

会場: 西宮市大学交流センター セミナー室1

【発表】「ヴァン・デ・ヴェルデの「新しき芸術」観とその背景—『新社会』誌、フランス画壇との関係から—」

白田由樹 (大阪市立大学)

【紹介】会員出版物紹介: 津田由美子、松尾秀哉、正躰朝香、日野愛郎(編著)『現代ベルギー政治—連邦化後の20年—』

石部尚登、中條健志、井内千紗

【映画鑑賞】『オーバー・ザ・ブルー・スカイ』(2012年、ベルギー)

発表要旨

「ヴァン・デ・ヴェルデの「新しき芸術」観とその背景—『新社会』誌、フランス画壇との関係から—」

白田由樹

これまでに扱ってきた、ベルギーのアール・ヌーヴォー運動の理論的推進者ヴァン・デ・ヴェルデの思想について、今回は1890年代に発表された記事や手紙などに見られる原始性志向とコスモポリタニズム的な性格に着目し、彼が語る「新しき芸術」の背景となった同時代の思潮や芸術動向を考察する。

とくに『新社会』誌は、学問領域や国境を越えて文芸や宗教学・民族学の最新の知見を広く紹介し、ヴァン・デ・ヴェルデ自身が影響を認める思想家の著作も多く掲載されていること、また原始性に関してはゴーガンやピサロとの影響関係が推測されることから、この二つの筋は彼の思想的特性を解明する上で鍵になると思われる。本発表では、以上の見通しに至った考察の経緯を論じるとともに、今後のアプローチの可能性と方法論を含めた検討をおこなう。

第75回研究会

(日本ベルギー学会共催)

日時: 2018年6月15日(金)18:00-21:30

会場: 在日ベルギー王国大使館

【発表1】「ボリナーージュの祭壇とオーヴェールの教会」

正田倫顕

【発表2】「19世紀フランス語圏におけるリズム理論と生理学の関係

—ベルギーの音楽理論家達によるリズム理論を中心に—」

大迫知佳子 (広島文化学園大学)

【発表3】「カール5世治下ネーデルラント女性総督マルグリットの平和外交」

加来奈奈(金沢学院大学)

【発表4】「フランドル彩飾写本の都市図像における実景とその転用

ーパリ国立図書館本(ms.fr.9087)を中心にー」

佐藤龍一郎(東京大学)

第76回研究会

日時: 2018年7月29日(日)13:30-17:30

会場: 明治大学 駿河台キャンパス研究棟4F 第三会議室

【発表1】「オランダ東インド会社VOCに対する南ネーデルラント(ベルギー)の影響について」

小川秀樹(千葉大学)

【発表2】「ベルギーにおける文化遺産保護の国際支援と協力」

井内千紗(国際短期大学)

【映画鑑賞】劇場版『フランダースの犬』(1997年、日本)

発表要旨

「オランダ東インド会社VOCに対する南ネーデルラント(ベルギー)の影響について」

小川秀樹

問題意識

17世紀オランダ海洋帝国の隆盛の背景として、南ネーデルラントから流入した資本や人材が果たした役割は、下記のごとく広く認識されている。

●「ネーデルラントの北部(オランダ)は南部(ベルギー)に較べてずっと後進的な地域であった」(栗原福也『ベネルクス現代史』、40頁)

●「アントウェルペン陥落によってアムステルダムに移住してきた国際的大商人たちは、オランダ商人をはるかに凌駕する巨額の資本…を持ち、さらに…ポルトガル・地中海など南欧との取引関係をこの市にもたらし」(同上書 46頁)

●「政治・経済・文化のいずれの分野においても、まず南部ネーデルラントが発展し、それから北部に波及するのが常」(『オランダ東インド会社』永積昭、50頁)。

それ以上の議論に進展しない現況の理由

しかしそれでは実際どの程度、南から北への、とりわけ人的貢献が行われたかについては、従来ほとんど顧みられることが無かった。その理由として、南から北への貢献については、南の人材が北で急速に内部化されており、オランダ自ら自発的に海洋帝国への南ネーデルラントの貢献を喧伝する必要は無いし、すでにオランダの構成要素になった旧南ネーデルラントのプロテスタント陣営が、それを今さら声高に主張する誘因にも欠け、さらに当然ながら、南ネーデルラント(現ベルギー)のカトリック陣営が、プロテスタント陣営の元同胞の偉業を宣伝することもしないという、三すくみの状況が現われているのではないか？

(前頁の続き)

本研究の手法と将来展望

以上の問題意識のなかで、限定的ではあるが、東インド会社 VOC のアジアや日本での活動を、現在のベルギーからの人材供給という視点から見直す試みである。手法としては、VOC に参加した主要人物を、その姓から出自分析を行い、南ネーデルランドの関与の程度を調べた。その際、例えばインターネット上の姓名検索サイト (www.americanlastnames.us) や VOC の人物系図サイト (www.geni.com/projects/voc) 等に大きく拠った。

本アプローチは、それがさらに精緻化され敷衍されれば、日本における鎖国議論やキリシタン禁教政策、近世初期の外交政策や蘭学を含む日欧交流史等々に新たな視点を提供するだけでなく、世界史的にはオランダの興隆と没落論、中央集権や地域分権、それにまつわる宗教論争等々の 17 世紀オランダ政治、さらにはポルトガル・スペイン流の略奪・貿易至上主義からイギリス流の植民主義への移行期に当たるオランダ式の海外進出などにも新たな視点を提供しうるものと期待する。

「ベルギーにおける文化遺産保護の国際支援と協力」

井内千紗

自然あるいは人為的な要因により、世界各地で歴史ある文化遺産が破壊・消滅や存続の危機におかれている。なかでも自力での保護が困難な状況にある発展途上国では、国際機関や先進国によって、モノ、ヒト、情報、経済、技術など、様々な形態やアプローチで支援が実施されている。ベルギーは先進国の中でも文化遺産の分野で積極的に支援を実施する国の一つである。特に、第二次世界大戦後、ベルギー国内の文化遺産保護や保存修復活動を活性化させたレイモン・ルメールは、自国での経験をもとに、文化遺産保存活動の国際的発展に大きく貢献したことで知られる。また、近年では無形文化遺産保護の分野においても、国際社会でしかるべき地位を築いている。本報告では、これらの動向をふまえながらベルギーによる文化遺産国際協力の実態を概括し、他の支援実施国との比較からベルギーならではの国際支援のあり方を明らかにする。

第 7 7 回研究会

日時: 2018年9月22日(土)18:00-21:30、9月23日(日)9:00-12:00

会場: 長崎大学文教地区キャンパス 総合教育棟 3 階 3 2 講義室

【発表 1】「19世紀末のベルギーにおけるプリミティヴィズムの潮流—二十人会と『新社会』誌の周辺調査から—」

白田由樹(大阪市立大学)

【発表 2】「パトリック・モディアノとベルギー」

山内瑛生(東京大学)

【発表 3】「ブルゴーニュ宮廷における紙製写本のパトロネージに関する一考察—ベルギー王立図書館、ms. 9095を例に—」

佐藤龍一郎(東京大学)

【発表 4】「1866年条約以前のベルギーの対日交渉計画と日本認識」

石部尚登(日本大学)

【発表 5】「ブリュッセルにおける社会融和に向けたモスクへの期待と試み—モランベーク地区を事例に—」

見原礼子(長崎大学)

発表要旨

「19世紀末のベルギーにおけるプリミティヴィズムの潮流—二十人会と『新社会』誌の周辺調査から—」

白田由樹

本年5月におこなったヴァン・デ・ヴェルデの「新しき芸術」の背景に関する発表に続き、6月から8月に実施した渡航調査の経過と現時点での結論を報告する。

ベルギーのアール・ヌーヴォーを特徴づける抽象性について、非西洋世界の影響を検証しようとする研究が近年始まっている。発表者が初めて着目したマルキーズ諸島との接点については、芸術サークル二十人組や『新社会』誌のコミュニティで「文明に汚されていない未開人」の概念が共有され、またゴーガンの作品を通じて「プリミティヴ」な民族の装飾に創作の源流を汲むことへの関心が喚起される状況が見えてきた。

さらに、『新社会』や新大学を通じた地理学者エリゼ・ルクリュ、その兄で民俗学者だったエリーとの親交と影響関係も確認され、社会主義やアナキズムの言説の中で「民衆」と同位に語られる「未開人」像が、ヴァン・デ・ヴェルデの理論と装飾デザインの模索に反映されているという見通しに至った。

「パトリック・モディアノとベルギー」

山内瑛生

フランスのノーベル賞作家、パトリック・モディアノは、ナチス占領下のパリにおけるユダヤ人の問題や自身の青年時代の記憶の物語を繰り返し扱ってきた。ユダヤ人の父とアントワープ出身の母から生まれたこの作家に関して、研究者たちは作中に見られるユダヤ性や自伝性、記憶の性質などに焦点を当てて論じてきたが、母親の出身地であるベルギーとの関連について取り上げることはほとんどなかった。しかし、モディアノの小説の根底に流れる記憶やアイデンティティの問題は、実は作中に現れるベルギーの表象とも密接に関わっているのである。さらに、それらはベルギー文学やベルギーの作家たちの語る母国のイメージともしばしば重なる。ベルギー文学の辿って来た道のりや彼らの文章に見られる「ベルギー」性と、モディアノの文学作品との間に共通する様々な側面を明らかにすることで、モディアノと母の故郷ベルギーとの関係を捉え直すことが可能になるだろう。

「ブルゴーニュ宮廷における紙製写本のパトロネージに関する一考察—ベルギー王立図書館、ms. 9095を例に—」

佐藤龍一郎

本発表では、15世紀半ばにブルゴーニュ公国で制作された紙製彩飾写本（ベルギー王立図書館、ms.9095）の再考を目的とする。この写本に対して、その注文において密接に関連すると考えられる羊皮紙を支持体とする別の写本（フランス国立図書館、ms.fr.9087）が現存しており、本発表では、主に両写本のミニアチュールと比較が中心となる。ミニアチュールの作者とされる写本彩飾画家ジャン・ル・タヴェルニエは、アウデナールデ出身でブルゴーニュ公フィリップ善良公やその廷臣の庇護のもと、1450年代から1460年代を中心に活動し、ms.9095とms.fr.9087はいずれも1455年以降に位置付けられる。ms.9095は単一のテキストで三点のミニアチュールを含み（fol.1r., 2r., 9r.）、ms.fr.9087は三つのテキストの合冊で六点のミニアチュールを含む（fols.1r., 2r., 9r., 85v., 152v., 207v.）ms.9095, fols.9r.とms.fr.9087, fol.9r.は構図が酷似していることから、両写本のミニアチュールには密接な関連が想定されてきた。さらに、ms.9095は紙に水彩で描かれるのに対してms.fr.9087が羊皮紙に通常の技法で描かれる点、共にフィリップ善良公のパトロネージ下で制作されたと推測されるが、実際にはms.9095がフィリップ善良公に所有されていたかには疑問が残る点などを主な理由として、ms.fr.9087と異なり、ms.9095はフィリップ善良公に献呈された写本ではないと推測されてきた。しかしながら、上述のような注文主や図像の類似に関心が向けられながらも、二点のfol.9r.については、構図の類似以上の指摘はな

(前頁の続き)

されず、具体的な細部や技法、同時代作例との比較はあまり試みられていない。また、両写本全体に関しても、その支持体の違いを当時の写本注文の実情やパトロンの好みに照らして理解する試みがなされているとはいえない。本発表の意義は、これらの不足を補い、両写本のミニアチュール（ミニチュア）の検討と当時のパトロネージの文脈にms.9095を位置付け直す作業が中心となる。まず、ms.9095, fol.9r.とms.fr.9087, fol.9r.とを比較し、次いでジャン・ル・タヴェルニエに確実に帰される『シャルルマーニュの年代記と征服記』の《献呈図》(ベルギー王立図書館、ms.9066, fol.11r.)やms.fr.9087, fol.152v.などを参照しつつ、両作品と他のジャン・ル・タヴェルニエの作例等の間に見られるモチーフの共有・技法の類似を考察する。加えて、当時の写本注文の過程やパトロンの好みなどを概観し、そこでms.9095のような紙を支持体とする写本がいかにかに受容されていたかを考察する。その結果、ms.9095がその技法等も含めて同時代の好みを反映し、かつ影響を与えていた可能性を示唆して、ms.9095を同時代の紙製写本受容の中に位置づけ直す。

「1866年条約以前のベルギーの対日交渉計画と日本認識」

石部尚登

日本がベルギーと通商航海条約を締結したのは1866(慶應2)年、ペリー来航からは13年、またいわゆる「安政五カ国条約」からは8年を経た時期で、日本にとっては9番目の条約締結国であった。一方、1830年にオランダから独立したベルギーは、独立により失った植民地に代替する新規市場の開拓を独立当初より模索していた。

本報告ではまず、1866年の通商条約締結以前におけるベルギーの対日交渉計画(とその頓挫)について整理する。1846年の植民地主義的なEtienne Mouttetの構想にはじまり、在広東領事による日白交渉、外交通商使節団の派遣、オランダ商館を介した日白貿易など、政府主導で日本との通商関係の樹立に向けた試みが繰り返された。

次に、そのような政治的な対日計画が繰り返されていた時期のベルギーの日本認識とその変遷を、L'indépendance Belge紙の日本関連記事から跡付ける。政治的な試みと同様、1866年の条約締結に向け、次第に具体的な日本イメージが形成していったことを示す。

「ブリュッセルにおける社会融和に向けたモスクへの期待と試みーモランバーク地区を事例にー」

見原礼子

2015~2016年のフランスやベルギーにおいて相次いだテロ事件を受け、ブリュッセルではムスリム系住民との間の融和の促進が優先課題として認識されている。本発表では、モスクに向けられる期待と実際の試みに着目し、とりわけモランバーク地区のモスク・アルカリル(Al-Khalil)を事例として検討する。

モランバークは多くの移民を受け入れてきた地区であるが、長年、厳しい経済・社会状況から抜け出せていない。連続テロ事件後には「テロの巣窟」として世界的に報道され、地区に対する負のイメージはさらに高まった。そのような中、時に厳しく、時に期待を持ったまなざしを向けられてきたのが、同地区で運営されるモスクである。とりわけブリュッセルで最大規模ともいわれるモスク・アルカリルに対しては、社会融和や対話の場としての機能を果たすべきだという外からの期待が近年高まっている。

本発表では、発表者がフィールド調査を続けてきたモスク・アルカリルにおける参与観察やインタビューを踏まえて同モスクの歴史や運営の現状を明らかにした上で、いくつかの試みを紹介しながら、モスクが社会融和に向けた役割を果たす場として期待されることの意味について考察する。

第78回研究会

日時: 2018年3月7日(木)13:00-18:00

会場: 神戸大学ブリュッセルオフィス

【発表1】「西フランデレン州ヴェストフーク郡におけるフード・ツーリズムとルーラリティの商品化」

飯塚遼(秀明大学)

【発表2】「フランデレン運動とワロン運動、両運動についての「言語」

石部尚登(日本大学)

【発表3】「移民送出国としてのベルギー—Red Star Line Museum のとりくみ—」

中條健志(東海大学)

【発表4】「ベルギーにおけるヤジディ(ヤズィーディー)教徒ディアスポラ」

松井真之介(神戸大学)

【発表5】「アール・ヌーヴォーの誕生—ヴィクトール・オルタと曲線—」

小田藍生(ブリュッセル自由(ULB)大学)

【発表6】「ジェームズ・アンソールにおける日本美術からの影響—《幽霊》を中心に—」

永井友梨(リエージュ大学)

発表要旨

「西フランデレン州ヴェストフーク郡におけるフード・ツーリズムとルーラリティの商品化

飯塚遼

本研究は伝統産業、郷土食、農村景観、生活文化などを資源として多角的なフード・ツーリズムが展開している西フランデレン州ヴェストフーク郡を対象として、フード・ツーリズムとルーラリティの商品化の関係性について議論することを目的とする。研究方法としては、ヴェストフーク郡で行われているフード・ツーリズムに関する取り組みを事例として、文献調査と関連アクターへの聞き取りからルーラリティの商品化の表出を分析した。また、観光対象の分布や土地利用に関するフィールドワークからフード・ツーリズムの展開を捉えた。ヴェストフーク郡では、農村景観を対象とする原初的なルーラル・ツーリズムの空間から、よりツーリズム対象が「食」に収斂していくグルメ・ツーリズムの空間にかけての4段階のツーリズム空間が存在しており、それぞれの空間においてルーラリティが商品化され観光者によって消費されていた。これらのサブ空間が観光資源として相互に関連することで、重層的かつ持続的なフード・ツーリズムの一大空間が形成されていた。

「移民送出国としてのベルギー—Red Star Line Museum のとりくみ—」

中條健志

2000年代以降、ヨーロッパでは移民をテーマとしたミュージアムが各地で構想、設立されている。報告者はこれまでフランスの国立移民史博物館、ルクセンブルクの移住資料センターを対象に、その設立の経緯と理念を分析し、それぞれの国で「移民」がどのように位置づけられているのかを明らかにした。本報告では、それらを比較対象としながら、2013年にアントワープに開館したRed Star Line Museum (RSLM) のとりくみを検討する。アントワープ発の旅客船 (Red Star Line号) でアメリカやカナダに移住した人びとの歴史をテーマにしたRSLMでは、ベルギーの移民送出国としての側面が強調されている。設立までの経緯とRSLMが掲げる理念、そして展示内容を分析した結果、19世紀末から20世紀初頭にかけてのヨーロッパにおける貧困や迫害から逃れた人びとにとっての庇護地として、またアメリカの歴史を築いた場所としてベルギーが位置づけられていることが明らかになった。

「ベルギーにおけるヤジディ(ヤズィーディー)教徒ディアスポラ」

松井真之介

学術的な資料や調査の蓄積が少なく、謎に包まれた集団であったが、近年、ダーイシュ(IS)による迫害によって皮肉にも世界的に注目を浴びつつあるヤズィーディー教徒に関して、リエージュに存在するコミュニティの現地調査の経過報告を行う。ヤズィーディー教とは何か、ヤズィーディー教徒とは誰か、一般的にどのような特徴があるのか、そして彼らは周囲からどのように「見られている」のかを明らかにする。その後リエージュのコミュニティに関する調査報告を中心に、これまでに存在した研究資料の定説と比較し、ヤズィーディー教徒ディアスポラのコミュニティがどのように変容しつつあるのかを検討する。

「アール・ヌーヴォーの誕生 ―ヴィクトール・オルタと曲線の創造―」

小田藍生

アール・ヌーヴォーの建築家たちは、建築は総合芸術(Gesamtkunstwerk, Art total)だと考えていた。彼らは建物だけでなく、ステンドグラス、照明器具、家具、絨毯、ドアノブといった建築の細部まで手がけ、調和のとれた空間を生み出した。しかし詳しく見ていくと、建築家ごとにアプローチは異なる。ヴィクトール・オルタ(1861-1947)は、依頼主の個性と建築、外観と室内、家具を構成する各要素の間の密接な繋がりを重視した。例えば、日本美術の愛好家の邸宅では、浮世絵風のステンドグラスを使用した。また彼が設計した椅子は、脚や背などの一つ一つが見事に融合している。オルタは建物や家具の各部分を滑らかに繋ぐために曲線を多用した。

前回の発表では椅子を分析対象とし、19世紀末から20世紀初頭に、この連結のコンセプトがオルタの中で急速に発展していったことを明らかにした。今回は連結の一つの手法である曲線に注目して、建物と家具の関係性を考えていく。まず、オルタがどのように作品に曲線を使うようになったのかを明らかにする。彼は最初に建物や彫像の土台に曲線を使用し、それを家具などの室内装飾に徐々に応用していった。次に、彼の線が発展していく過程をファサード(建物の正面)や壁面装飾、ステンドグラス、床のモザイク装飾、家具、とりわけ椅子を中心に分析していく。

「ジェームズ・アンソールにおける日本美術からの影響―《幽霊》を中心に―」

永井友梨

ジェームズ・アンソール(1860-1949)は「仮面の画家」として広く知られるが、その作風には日本美術からの影響も考えられる。近年、アンソールと日本美術との関連性については研究の俎上に上がる機会が増えてきた。アンソールは、同時代の芸術家と比較すると、ジャポニスムブームからは一見距離を置いているようにも思われるが、ジャポニスムの余波は確実にこの画家に及んでいた。

アンソールのエッチング作品の一つに《幽霊》(1889)というものがあるが、幽霊の出現のイメージ、造形、構図を見ると明らかに日本の作品を下敷きにしている。また、美術史家グザヴィエ・トリコ氏からの情報提供により、当初この作品は《日本的幻想》という題名だったことが明らかになった。発表者は、アンソールが、葛飾北斎(1760-1849)が挿絵を担った読本『戀夢艸』(1809)の一部を参照した可能性を指摘したく、本発表においてはそのことを中心に論を展開する。



ベルギー研究会運営委員(2019年度～)

- 会 長:岩本和子(渉外)
副会長:石部尚登(ウェブサイト)
 中條健志(例会)
 山口博史(シンポジウム)
委 員:井内千紗(ML、会員管理)
 今中舞衣子(シンポジウム)
 内田智秀(会報)
 白田由樹(例会)
 吹田映子(例会、会計)
 鈴木義孝(例会、書記)



刊行物の紹介

ゴッホと〈聖なるもの〉

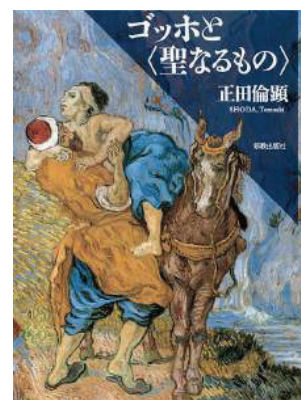
正田倫顕 著

新教出版社、2017年6月1日刊

定価：2,700円＋税

ISBN：978-4-400-82802-0

強烈なエネルギーが渦巻くゴッホの絵画。その核にある〈聖なるもの〉の真相、絵画と宗教的現実の相互浸透性、キリスト教との関係を明らかにした著作。書簡と作品を比較するだけでなく、画家が絵には表わしたものの、その内実を説明していない事柄を見つめた。第一章では教会の絵を扱い、第二章では《善きサマリア人》や自画像、第三章では太陽の絵を分析した。ゴッホの絵画に通底する宗教性に肉迫した。オールカラー38頁の口絵。



ネムレ!

アンネリース・ヴェルベーク 著、井内千紗 訳

松籟社、2018年12月1日刊

定価：1,800円＋税

ISBN：978-4-87984-370-8

フランダースを代表する現代作家の一人、アンネリース・ヴェルベークが2003年に発表した小説デビュー作。極度の不眠症に陥った二十代の女性マーヤと五十代の男性ブノワは、現実と妄想の狭間で救いを求めて街を彷徨う。

ベルギーにおけるオランダ語文学の「現在」を紹介するシリーズ「フランダースの声」第三弾として刊行。



今後の活動予定

第79回研究会

日時：2018年5月12日(日)

会場：西宮市大学交流センター セミナー室1

第80回研究会

(日本ベルギー学会との共催)

日時：2018年6月21日(金)

会場：在日ベルギー王国大使館

第81回研究会

時期：2018年7月下旬

場所：東京都内

第82回研究会

時期：2019年9月22日(土)、23日(日)

場所：信楽

第83回研究会

時期：2020年3月上旬

場所：ブリュッセル

各会の詳細は、メーリングリストで随時お知らせします。

ベルギー研究会 会報

Newsletter of Japanese Association for Belgian Studies

第7号

発行:2019年5月

編集:井内千紗

事務局:神戸大学大学院国際文化学研究科 岩本研究室

ウェブサイト:<http://www40.atwiki.jp/kbek/>



ベルギー研究会

Japanse vereniging voor de studie van België
Association japonaise d'études belges
Japanische Vereinigung für Belgische Studien

Japanische Vereinigung für Belgische Studien

Association
d'études
japonaises
de Belgique